



秋の読書週間はじまる ～先生による「おすすめ本」紹介～



11月1日(月)より本校では「秋の読書週間」が始まっています。HRでは、生徒が銘々お気に入りの本を読んでいる光景が見られます。4日(木)のSHRは先生によるおすすめ本紹介の日で、リクエストされた先生がそのクラスに行き、自分の好きな本を紹介しました。

1年1組の教室に入るとN先生が2冊を紹介していました。

さすが国語のN先生、1冊目はなんと『新明解国語辞典(三省堂)』でした。辞書を読んでいるN先生は、辞書は編集者により全く内容が異なること、辞書を愛読していると言葉の世界が広がることなど、大変興味深い内容でした。私も中学生時代、この辞書の印象は強く残っています。

2冊目もびっくりした選定で『春琴抄(谷崎潤一郎)』。文学の奥深さ、言葉のもつ力について触れ、昨今のネットでの書き込みによるいじめ問題にも発展して示唆をくださいました。私でさえすぐ読み直したい気持ちになったので、若い生徒の皆さんには本に向かう良い刺激になったと思います。

俳句で秋を詠む ～1年生の野外創作活動～



11月4日(木)の3時間目、1年生は国語の授業なのに校外へ。S先生が指導する俳句の授業の一環で、外に出かけて季節を感じ、その実感を575で表現していました。雲一つない秋の校外は、赤く染まる紅葉、見事な黄色に色づいたポプラ、遠くの浅間山や蓼科山などが、秋の輝く日差しに照らされ澄んだ冷たい風に洗われ、目がさめるような美しさ。生徒たちは思いの景色を楽しみながらメモを取り、教室に戻って創作をしていました。



そこで私も一句『手をふってポプラ景旅だつ空たかく』

困ったお話(その50) (50回ありがとう)

「困ったお話」もこれで50回になった。紙面が余り困って苦し紛れに始めたことで、こんなに続いたことは我ながら驚嘆に値する。これも、いつも読んで感想や質問を寄せてくださる奇妙な皆さまのおかげだ。心から感謝するとともに、お寄せいただいたよくある質問をQ&Aにまとめてみた。

Q: 毎回とてもくだらない内容と表面的には思えるのですが、本当は何か深い意図や考察が残るのでは?

A: 一応教育者の端くれが書く文章なので、何か教育的かつ哲学的で深遠な結論が待っているかと思わせ、「結局何もなかった～」という衝撃と憤慨だけは残ると思います。

Q: 校長先生の文章を読ませていただき、こんな思慮の浅い人でも社会人としてやっていけると自信が持てました。ありがとうございます。このような軽薄な文章を書く秘訣はあるのですか?

A: 「文は人なり」と言います。文章は心が宿るので、おのずと書き手の人格が滲み出てくるものです。ここまでお答えすれば、察してくださると思います。

Q: 「困ったお話」を本として出版する計画はありますか?

A: はい、あります。ただし書名は『鬼滅の^{かたな}刀』として袋とじにし、漫画コーナーの売れ筋本に平積みにするという条件で。

念のため、裏表紙に小さく「この本は返品できません。」と記しておけば完璧です!

